

# 惻隱の情 ——イマジネーションを阻害する“イマジネーション”

織田和家<sup>1</sup>

## “Sokuin no joh” – Another “Imagination” Which Prevents Imagination

ODA, Kazuya<sup>1</sup>

**要旨：**儒教的倫理観は日本の教育・社会のバックボーンをなすものとして、人々の意識形成に大きな役割を果たしてきた。イマジネーションに関して言うならば、儒教的倫理観の根幹の1つとして孟子の「惻隱の情」を挙げることができる。この「惻隱の情」とは「かわいそうに思って同情すること。憐れむこと」であるが、これは一種のパターンリズムであり、本来の他者理解と異なるのみでなく「上の者に従う」という発想からイマジネーションを阻害する要因ともなる。これに対置されるべきものの1つは教養主義であろう。単純に「上の者に従う」のをやめ、「どこへ行き、何をやるのか」を自分で決定できるようになるための必要条件である教養は、他者理解を行うイマジネーションを生み出すための素地ともなると思われるのである。

**キーワード：**イマジネーション、現代社会、孟子、惻隱の情

### はじめに

筆者の関心は「イマジネーション」である。すなわち、現代の日本人が未来、過去、自己、他者へのイマジネーションを欠くことが、様々な問題を引き起こすのみならず、それが安楽への全体主義と関連し、人間関係や学習の態度等にも影響をもたらしていると考え、この問題に関して分析を進めようとしているのである（織田2013）。

この研究を進めるにあたって、1つ念頭に置くべきなのは、人々の意識形成に大きな役割を果たすのは教育、および周囲の環境だということだ。そこでまず日本社会において長らく支配層の理念として用いられてきた儒教、とりわけ「惻隱の情」に注目したい。なぜなら「惻隱の情」とは「かわいそうに思って同情すること。憐れむこと」（明鏡国語辞典）であり、正にある種の“イマジネーション”であるからだ。ところが、一方で同情による感情移入と他者理解とは異なるのである。同情とは相手が自分と同じ価値感情を持っていると考えて、その同じ価値感情によって相手の境遇を思いやり「相手のために何かをしてあげたいと思うこと」であるが、相手の価値感情が自分のものと異なる場合には、自分の価値感情を相手に押し付けることにもなる（桂木2002）。言うなれば惻隱の情とは、往々にして支配者ないし目上の者

が、イマジネーションによる他者理解をすることなく一方的な同情を施すことになりかねず、これが求められる倫理原則として長い間定着してきたことが、日本人がイマジネーションを欠いたことの1つの要因ではないかという仮説が立てられるのである。本稿の目的は、この「惻隱の情」について検討し、日本人のイマジネーション欠如との関連を探ることにある。

### 1. 孟子の「惻隱の情」

孟子（BC372? ~ BC289?）は、中国・戦国時代の思想家である。儒家の1人であり、孔子の「仁」の思想を深めて「仁義」および性善説を主張した。

孟子の師は孔子の孫・子思の弟子である。言わば孟子は、子思の孫弟子ということになるが、直接の師の名前は明らかでない。BC479年に孔子が死去した後、弟子たちは仕官するために各地に散り、さらに墨家による批判等もあり、儒家は衰退していた。唯一魯に残り儒家を守り続けたのが曾子であるが、子思はその弟子であるから、孟子は孔子の四伝の弟子とも言える。従って孟子は孔子を深く敬愛し、儒学八派の一角をなしたのであるが、逆に言えば孟子の思想は孔子の思想を発展させ、以降の儒学に深い影響を与えたとも言える（加賀1980）。

さて、今回注目するのは「惻隱の情」であるが、その要諦は『孟子』巻第三「公孫丑章句上」によれば、こう

いうことである。  
「孟子が言われた。『人間なら誰しも憐れみの心はあるものだ。（略）では、誰にもこの憐れみの心はあるものだ

受稿日2013年11月29日 受理日2013年12月9日

1 専修大学人間科学部社会学科 (Department of Sociology, Senshu University)

とどうしてわかるのかと言え、その理由はこうだ。たとえば、ヨチヨチ歩く幼子が今にも井戸に落ち込みそうなを見かければ、誰も思わず知らずハッとして駆けつけて助けようとする。これは可哀想だ、助けてやろうと（の一念から）とっさにすることで、もちろんこれを縁故にその子の親と近づきになろうとか、村人や友達からほめてもらおうとかのためではなく、また、見殺しにしたら非難されるからと恐れてのためでもない』（孟子1968）

これは孟子が性善説を説いた有名な部分であるが、ここでは惻隱の情が「これは可哀想だ、助けてやろう」という憐みの情であることに注目したい。これは典型的なパターンリズムだ。だが上述したように、感情移入と他者理解とは異なるのである。上記の例のように幼子が井戸に落ちそうだななどという場合は何の問題もないが、必ずしも同情が相手にとってありがたいこととは限らない。だが孟子は、この惻隱の情こそが孔子の説く仁につながるものだと、次のように指摘する。

「あわれみの心は仁の芽生えであり、悪を恥じ憎む心は義の芽生えであり、譲り合う心は礼の芽生えであり、善し悪しを見分ける心は智の芽生えである」（孟子1968）

儒学の最も重要な概念である仁・義・礼・智、その中でも孔子が最も重視したと言っているであろう仁の萌芽がこの惻隱の情だと言うのだ。そしてその儒教的倫理観が今日の日本に継承され、社会的通念と化していることを考えるならば、この孟子的パターンリズムがその根幹にあると言えないだろうか。だとすればそれは本来のイメージーションを阻害し、同情と感情移入に置き換えられることを促していないだろうか。単純に上の者の「あわれみ」にすがっていればよく、またそれが最善の道であるとされれば、自分で物事を考えるのはむしろ害悪とされかねず、そこにはイメージーションの発生する余地はなくなる。

筆者は性善説を否定するものではないし、惻隱の情そのものを批判するわけではないが、それがイメージーションを阻害するとなれば、これは看過すべきではないであろう。また「上の者」は必ずしも「下の者」のことを考えているわけではなく、考えたとしても資本の論理には抵抗できない。それは資本主義の歴史とともにある、労働者の解雇・失業・窮乏化が何よりも雄弁に物語っている。

## 2. いかによりイメージーションが阻害されるか

儒教的倫理観は、今日の日本の至る所で見ることができ、職場・学校・地域から暴力団に至るまで、義理を重視し人間関係に気を遣う「仁義」、目上の者に従い年長者を立てようとする「礼」、世話になった者に誠実であろうとする「忠」、親孝行や長幼の序を重視する「孝」等々。職場では先輩―後輩関係が幅を利かせ、それは社会に出るための訓練所とも言える学校にも持ち込まれ、とりわけ多くの体育会に顕著である。正義や節度は常に求められ、裏切りや背信は許されないものとされ、これらは日本人の集団主義を支える倫理則となっている。そしてそれは「お前たちのためを思って」という名目で容易に体罰やしごきに転化し、被害者側も「上司／先輩は自分のためを思ってくれている」という誤った認識を持ちやすく、それは家庭内の虐待にまで同様の影を落とす。また逆に儒教的パターンリストは惻隱の情をもって部下や後輩を守ることを考えるので、事故や不祥事でも起きようものなら往々にして上司や先輩は部下や後輩を守ろうとし、それが組織的隠蔽やまやかしの「処分」につながった例は枚挙に暇がない。護送船団方式や車座社会はよく海外からの批判を受けるが、この批判は、まずは身内のことを考え「惻隱の情」を働かせるが、外部に対してはイメージーションを行使しないという日本人の姿勢に対しても向けられているのではないか。今の日本は独裁者に従う国ではないが、目上の者の惻隱の情に従って自由と責任を失っていたのでは、結局同じことではないか。

なぜこれがなくならないのか。それは「楽だから」であろう。上司や先輩、あるいは先生の言うことに従っていればよく、自分で考えずに済むのだから。一方で「出る杭は打たれる」という文化もある。結果、いわゆる「お役所仕事」に典型的に見られるように、前例踏襲・事なかれ主義の文化ができて上がってしまった。「何かと言えば前例がないとか管轄が違うとか言って結局仕事をしないのが優秀な公務員」というのはお役所仕事に対する皮肉であるが、ここにはイメージーションが必要とされる土壌はない。そしてそんな「優秀な」労働者を生むべく、学校教育もまた暗記中心・詰込主義となり、一方で部活動の顧問や先輩によるシゴキ・体罰や「周囲と違う」とされた者に対するイジメは後を絶たない。

藤田省三の指摘する「安楽への全体主義」も相俟って「楽」な道を選ぼうとしてパターンリズムに従う者や、「惻隱の情」で相手のことをわかった気になり、結果的に相手を窮地に追い込んだりする例は多い。長谷川一恵の指摘する「わかりやすい授業の弊害」も惻隱の情から

派生したことは疑いないだろう。教師が生徒のニーズに合わせてやりやすい授業をこころがけた結果、生徒の学習意欲や正統的な学力向上を阻害しているというわけである（長谷川 2006）。

### 3. 教養主義とイマジネーション

ならばこの「惻隱の情」に対しては何が対置されるべきだろうか。もちろん本研究の主題であるイマジネーションなのであるが、それは——特に今まで見てきた日本社会において——どうやって生み出されるべきだろうか。

加藤周一は「教養主義を死に追いやるもの」として、①古典の教養は直接には何かの職業や技術の役には立たないこと。②高等教育の大衆化、を指摘し、テクノロジーは観察対象を単純化し、統計的に扱う（＝個性や内心は無視されるので想像する必要がない）が、大衆化した高等教育を受ける者は直接職業に関係あること（＝テクノロジーを扱う能力等）を学びたいと考えるので、教養主義は衰えてきた、と指摘している（加藤 2005）。そして教養が衰えると、テクノロジーはあっても、それを使ってどこへ行くのか、何をやるのかが決定できない、としている。

筆者には、ここには惻隱の情のもたらす儒教的パターンリズムと同質の問題点があるように感じられる。加藤の言うどこへ行くのか、何をやるかを決定するには、まずその結果何がもたらされるか、ということ想像しなければならない。だがそれを親や上司や先輩や教師が惻隱の情をもって決定したのであれば、結局テクノロジーを主体的に使いこなすことはできなくなるのである。

だとすれば何が必要か。加藤は教養主義の復権を訴える。なぜなら①文学的教養の中からは「想像的自由」が引き出される。それは社会の中の自由である人権につながる。②他者の心の中に入っていき能力は、小説や詩を読まないで発達しない。③文学・芸術には差別を乗り越える可能性がある——からだを指摘する（加藤 2005）。

文学的教養を深めることにより、他者の心をきちんと想像できるならば、それを傷つける差別はできないはずだ、ということであろう。ここにこそ、一方的な惻隱の情などではなく、正しいイマジネーションや他者理解の萌芽があるのではないだろうか。

### 4. 探究すべき課題

以上、イマジネーションを阻害する要因としての「惻隱の情」および儒教的パターンリズムについて検討した。上述したように、人々の意識形成には教育および周囲の環境が大きな影響を及ぼす。日本の場合、その根底に儒教的倫理観があるのは明白だから、それについて引き続き考察を進めることは有意義であろう。またそれ以外にイマジネーションを阻害する要因もあると思われるので、教育史も参照しながら分析を続けて行きたい。

教養主義の復権についても模索が必要である。上述した加藤の発言では、その具体的方策までは示されていない。どうすれば教養主義を再構築でき、そこから創造的自由および他者理解を引き出せるか。文学は1つの鍵であろうが、他の要因も含めて総合的に検討する必要があるだろう。

### 参考文献

- 織田和家 2013 「イマジネーション——『見えざるもの』へのまなざし」『専修人間科学論集』Vol. 3, No. 2（社会学篇第3号）。
- 加賀栄治 1980 『人と思想 孟子』清水書院。
- 孟子・小林勝人訳注 1968 『孟子（上）』岩波文庫。
- 桂木隆夫 2002 『自由とはなんだろう——グローバルゼーションと日本人の倫理観』朝日新聞社。
- 長谷川一恵 2006 「正統的な学習の復活を」『中央公論』2006年3月号所収、中央公論社。
- 加藤周一 2005 「教養とは何か」『教養の再生のために——危機の時代の創造力』影書房。